

第十五帖

蓬生よもぎふ

古ふるりにたる 御厨子みづし あ
けて、唐から守もり・藐は姑こ射や
の 刀と 自じ・かぐや 姫ひめ の
物語ものがたり の、絵ゑ にかきたるを
ぞ、時々ときどきのまさぐり 物もの に
したまふ。

（末摘花は）古びた戸棚を
開けて、唐から守もり・藐は姑こ
射や の 刀と 自じ・かぐや 姫ひめ の
絵物語などを、その時々のお
ひまつぶしにしていらつしや
います。

その頃、源氏の殿に忘れ去
られ、埋もれた姫君がいらつ
しやいました。

かの末摘花の姫君は、もと

より源氏の殿の足も遠のきがちだったところに、須磨退去後は顧みられようもなく、そのお暮らしは困窮をきわめ、召使たちも散り散りになり、お邸も荒れ果てるばかりでした。

お手紙を交わすお友達とていらつしやらず、時代離れの日常をお過ごしです。国くくに守もりの北の方になった叔母君が、宮家の一族に昔侮られた意趣返しに、零落した姫君を侍女にしていじめ抜こうと、西国の任地に連れていくべく、あれこれ責めたてます。

しかし、末摘花は亡き父宮のお邸を守り、源氏の殿だけをけなげに信じ続けて、応じようとはしません。そんなこ

ととは露知らぬ源氏の殿は、
花散里はなちるさとを訪ねる道すがら、
荒れ果てたお邸のそばを通り
かかり、ようやく末摘花を思
い出されました。

「いや、決して忘れていた
わけではないのだけれど……」
殿方の言い訳はいつの世も同
じ。しかし変わらぬ心に胸打
たれた源氏の殿は、以後末摘
花をねんごろに扱い、二年後、
二条の東院にお迎えになりま
した。

（文・小金陽介）